

63 曲直瀬道三『薬性能毒』の研究

野口大輔・遠藤次郎¹⁾中村輝子・真柳 誠²⁾¹⁾ 千葉大学柏の葉診療所²⁾ 東京理科大学薬学部³⁾ 茨城大学人文学部

今日、初代曲直瀬道三（一五〇七～九四）の薬物書として知られる『薬性能毒』の諸版本は、すべて養嗣子玄朔を始めとする後人の増補改訂をうけている。演者らは『薬性能毒』の成立過程を検討するなかで、道三原著の旧態に近いと思われる写本数種に注目した。これら道三原著の「能毒書」は以下に挙げるごとく内容が異なる。本研究では道三原著の「能毒書」を整理し、その相互関係について検討した。

① 『能毒』（龍谷大学大宮図書館蔵）、成立年不明。莎（香附子）を始めとする七一種の常用薬物を記載し、次に甘草から始まる五五種を追記する。

② 『本草能毒』（杏雨書屋蔵、乾五三二四）、永禄八（一五六五）年成立。辰砂から始まる二一〇種を玉石草穀菜などの分類により記載する。

③ 『日用薬性能毒』（杏雨書屋蔵、乾五三三三二）。永禄九（一五六六）年、毛利陣中での著作。師伝の一〇種と帰洛して以来まとめられた道三自身による五三〇種と収める。跋文には「凡一百七十三種、証類本草、湯液本草、丹溪心法、衍義、王綸本草集要、参考互換」と、著述にあたり参照した中国本草医書が記される。

ところで、注と図が付された刊本『能毒図鈔』（京都大学富士川文庫蔵）の注には、七一種の常用薬物とその他五五種を記載するなどの、原本の特徴がいくつか記載されている。①は『能毒図鈔』に記された原本の特徴を満たしており、『薬性能毒』諸版本の内容ともよく一致する。したがって①は『薬性能毒』諸版本の原本に相当するとみられる。

また『能毒図鈔』の注には『薬性能毒』成立の由来について、道三の著作ではあるが田代三喜より伝えられたものであると記されている。そこで田代三喜『三

婦廻翁医書』とも比較した。『三扁廻翁医書』巻四は道三の『薬性能毒』と同様、各薬物の「能」と「毒」を記載しており、中国本草書と乖離した口伝的内容となつている。『三扁廻翁医書』と類似する内容は①、③、②の順に多い。

一方、②③は『薬性能毒』諸版本と異なる内容が多い。③の跋文に示された『証類本草』『湯液本草』『本草衍義』『本草集要』と比較したところ、②③についてはこれらの中国本草医書からの引用が多くみられたが、①には少なかった。

以上より、②③は中国本草医書に基づく学問的内容の「能毒書」、①は三喜もしくは道三自身による口伝的内容の「能毒書」ということができる。そして①系統の「能毒書」のみ増補改訂をうけ、上梓されたのである。

それでは①②③の「能毒書」はいかなる関係にあるのであろうか。一般に、②③の成立年や収録薬物数から②、③、①の順に書き改められたと考えられている。本発表では①の成立年代を推定しつつ考えてみた。

学問的内容の「能毒書」②③は一五六五年～一五六六年に集中的に著されているが、それ以前に師・導道より「百二十種之功能」を伝授されている（『当流医学之源委』）。

一方、口伝的内容の「能毒書」①と内容が類似した書に天文十八（一五四九）年の年記が記された『救急本草』（杏雨書屋蔵、杏一八三八）がある。また永禄年間ごろの師弟問答を収めたとみられる『翠竹庵答問書』（京都大学富士川文庫蔵）には「能毒二益母草二月経在再ト云」という②③にはみられない①系統の「能毒書」からの引用がある。よって①系統の「能毒書」も②③が著された頃には存在していた可能性が高い。なお玄朔は元龜二（一五七二）年に①系統の『薬性能毒』（杏雨書屋蔵、乾五三二九）を校訂しており、①系統「能毒書」の推定成立年は一五七一年を下限とすることができる。

以上のことから②、③、①の順に学問的「能毒書」から口伝的「能毒書」に変遷していったとは考えにくく、両者が併存していた可能性が高い。